

2021年度

K 1

国 語

人文社会科学部（社会学科，言語文化学科）

2月25日（木）

教 育 学 部（学校教育教員養成課程）

【前期日程】

【音楽教育・美術教育・保健体育教育専修は除く】

15：20～16：40

地域創造学環（選抜方法A）

16：00～17：20

注 意 事 項

試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで，問題冊子，解答用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って，全部の解答用紙（4枚）に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

- 3 この問題冊子は，7ページあります。はじめに，問題冊子，解答用紙を確かめ，枚数の不足や，印刷の不鮮明なもの，ページの落丁・乱丁があった場合は，手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 5 文字数制限のある解答用紙の記入については，下記の点に留意すること。

<ul style="list-style-type: none">・書き出しは，一マスあけない。・改行したら一マスあける。・句読点等の記号はそれぞれ一マスとする。・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」は一マスで使う。

- 6 問題は，声を出して読んではいけません。
- 7 各問ごとの配点は，比率（％）で表示してあります。

試験終了後

- 8 問題冊子は，必ず持ち帰りなさい。

問題訂正

科目 国語 (K1)

訂正箇所

6ページ 問題

2

本文(原文) 3行目

(誤) ……たびたび臥す床あり、…

(正) ……たびたび炎上にほろびたる家またいくそばくぞ。ただ仮
の庵のみのだけくしておそれなし。ほど狭しといへど
も、夜臥す床あり、…

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(配点六〇%)

爛漫と花をつけた桜並木の下を自転車で走っていく。つがいの鴨は川面をスベるように進み、白鷺が中洲に舞い降りる。去年と変わらない春の光景。ただ違うのは、土手にシートを広げて憩う花見客の姿がないことだ。花や鳥たちにとっては変わらぬ春。人にとってはフオンな春。どこまでも続く花の下を走り抜けながら、それぞれの生物が生きている環世界の違いをあらためて思う。同じ時空間を共有していながら、棲んでいる世界は異なっている。

でもいま、私たちが恐れているのは異なる環世界の間を往き来するものだ。動物から人へ、人から人へ。生物の間を往き来し、感染し、影響を及ぼすもの。

かつてレヴィニストロースは狂牛病(牛海綿状脳症：BSE)について、人間が作り出した共食いの帰結として論じた。ウシの死骸の一部を飼料に混ぜてカチクに食べさせたことがこの病の蔓延を招き、病んだウシの肉を食べることで人間も死の危険に晒される。彼が指摘したのは、ウシがウシを食うことだけではなく、人がウシを食べることもまた、動物同士の共食いという一種のカニバリズムにはかならないということだった。そこには「食べる」という抜き差ししない関係を通して他の存在とつながりあい、相手の一部を自己の中に摂り入れ、それによって危機的な影響を被ってしまうという、つながりと同化の負の側面が示されている。

だが、あえてカニバリズムというまでもなく、私たちは常にそうした危うさをはらんだ自他のつながりと融合を生きているのかもしれない。無数の物質を摂りこむことで「私」が形成されると同時に、「私」から出ていく物質には私の一部が含まれている。そのようにして、私は無数の他からなるものに、無数の他の中に拡散している。自己でもあり他でもある物質は、そうしていくくつもの環世界の間をめぐり流れる。

食べること、触れあうこと、世話すること、分かちあうこと。そうした日常的な行為を通して、私と人間ならざるものを含む他者たちの断片は延々と受け渡しされ、摂取され、放出され、拡散し、循環していく。

南アジアの村で、あるいはメラネシアの島で、人類学者たちはそうした相互浸透的で拡散的な「人」のありように出会ってきた。水や食物、血液や母乳、供物や贈り物。それらの内に含まれ、やりとりを通して人びとの間を受け渡されていくものを、人類学者は「サブスタンスコード」と呼んだ。それは物質としてのサブスタンスと、人のありようを方向づけ、自己と他者、人間と自然の関係を秩序づける規との一体性をあらわす概念である。人類的な議論において、このように他者のサブスタンスコードを摂りこむことで生成するとともに変容し、自己の一部を放出することでつながりの中

に拡散してゆくような人のあり方は、明確な境界をもち、それ以上分けられない存在としての「個人(individual)」と対比されるべき「分人(dividual person)」と呼ばれ、一部の非西洋社会における独特な人間像を表すものとされてきた。

ところで、生物学者の中屋敷均によれば、ウイルスなるものは一般に、キャプシドというタンパク質の集合体が、固有の遺伝情報からなる核酸を包みこむという基本構造をもつという。中屋敷はまた、親から子へという鉛直方向における遺伝子の伝達とは異なり、同時代に存在する他種の生物の間で遺伝子がやりとりされるといふ、遺伝子の「水平移行」を媒介するウイルスの働きについて述べている。たとえば、ある宿主の遺伝子をウイルスが運び出して別の宿主に感染することで、前者の遺伝情報が後者に移行することがありうる。

コード化された情報を内包し、宿主の間を水平方向に移動していく物質^②とすればウイルスは、いわば文字通りの「サブスタンスコード」だといえるかもしれない。

ただしもちろん、それは人類学者によって長らく議論されてきたサブスタンスコードと同じではない。人類学的な議論において、「コード」という語は符号化された情報というよりも人としての規を意味しており、ゆえに人類学的なサブスタンスコードの概念には、社会関係や価値観やモラルなどが含意されている。他方で、ウイルスに含まれるコードは本来的に、社会的なものでも倫理的なものでもない。

その一方で、ウイルスを含む生物学的なサブスタンスコードの流通は、社会化されることがありうる。たとえば、あるウイルスの感染経路をたどろうとするとき、それはウイルスが伝播^{てんぱ}していく宿主と宿主の関係性をたどり、明らかにしていくことにほかならない。そのつながりは次々に枝分かれし、伸展し、拡散していく。このとき、宿主である「私」の微小な断片が接触を通して社会関係の網の目の中に分散していくとともに、無数の他者たちの断片が知らぬ間に「私」の中に混入していることが、想像でも比喻でもなく、端的な事実として知らしめられる。

そうして気づかされるのは、透過的で拡散的な「分人」としての人が、遠い異文化に生きる人びとの想像の産物であるのではなく、確固たる境界をもち、これ以上分けることができない存在としての「個人」こそが、たぶん幻想なのだということだ。

サブスタンスコードや「分人」などの概念を提唱した人類学者たちは、南アジア社会において、危険をはらんだ「他者」との接触や物のやりとりがもたらすかもしれない影響から自分の身を守るために、人びとが編みだした規範やふるまいの例を報告している。

相手と触れあわない、共食しない、同じ食器を使わない。あるいはまた、相手と適切な距離をとり、互いの間に一時的な境界を引く。

他者との接触は潜在的な恐れをほらみ、接触にともなうサブスタンスコードのやりとりには常に危険が潜んでいる。そして、そうした危険を回避するためにつながりを断ち切ろうとする方法は、いつもどこか似通っている。

遺伝情報からなる核酸を包みこんだタンパク質の集合体。そんな生物学的なサブスタンスコードは本来的に、人間のなものでも社会的なものでもない。だが、それが社会関係を通して伝播し、拡散し、それを受け渡しする人びとの生に重大な影響を及ぼすとき、人類学者の見出したサブスタンスコードの場合と同じく、その流通を制御し、やりとりをコントロールするための方法が編みだされる。

ただし今や、そのために用いられるのは洗練されたテクノロジーだ。スマートフォン^(注)の位置情報や検索履歴の統計データを用いたクラスター発生エリアの推定、携帯電話やICカードのデータを用いた感染者の移動経路の特定、スマートフォンのアプリを用いた利用者同士の接触の記録と感染者との接触の通知。

これらのことを可能にしているのは、普段はさほど意識されることもないスマートで便利な情報ネットワークだ。ウイルスという生物学的なサブスタンスコードの流通を把握し、制御するためにインフラ化した情報のネットワークが用いられ、それを補完するために新たな技術が開発されていく。人びとの移動経路が追跡され、互いの接触が記録され、感染の軌跡が可視化される。そうやって部分的にせよ露わにされるのは、皮肉にも「個人情報」という名で呼ばれる私たちの痕跡、私たちの断片、私たちのつながりと混交と拡散のありさまである。

たぶん individual など、これまでに一度も存在したことはなかったのだ。

だが、人間によるそうした把握や制御の試みをよそに、ウイルスは人と人との間を、異なる環世界に生きる生物たちの間をめぐり流れる。そのことが可能であるのは、まずもって異なる存在である「私」たちの間に、少なくとも授受の関係が成り立つような共通項があるからだ。くわえて、ウイルス^(注)のジンソクな流通と広範な拡散を可能としているのは、人間の作りだした社会的ネットワークの存在にほかならない。

だからこそいま、人間性や社会性とは本来的に無関係なサブスタンスコードとして、異なる存在の間をめぐり流れるウイルスの流通を見つめる視座と、そうした流通がどのようなネットワークによって媒介されており、それに対処するためにいかなる社会的・政治的な方法が編みだされ、テクノロジーとして実装され、普及することで社会の常態を変えていくのかを注視する視座の両方が必要であると思われる。生物学的なサブスタンスコードの流通と、社会的かつ政治的なネットワークのもつれあいを見定めるために。

レヴィ・ストロースの論考に戻ろう。狂牛病の蔓延を、人為的に作りだされたカニバリズムの破滅的な帰結とみる彼の指摘によって気づかされることは、この病は「ウシがウシを食べ、その肉を人間が食べる」という、自然状態ではありえない食物連鎖によって生じたサブスタンスコードの思いが

けない伝播と混交の結果であるということだ。従来、そうした危険な混交を避け、サブスタンスコードの流通を制御する装置のひとつが、禁忌と呼ばれるものであった。自然の掟おきてとみえるまでに根源的な禁忌が破られたとき、危険をはらんだサブスタンスコードは制御を超えて氾濫し、それを摂取した者を死に至らしめる。

南アジアの各地で調査を行なった人類学者たちは、サブスタンスコードのやりとりを通して他者と混じりあい、浸透しあうことの危険性に、人びとが非常な注意を払っていることに注目していた。それぞれの社会において、他者との接触や物のやりとりは注意深く秩序化されてきたが、それは人間同士の関係性のみならず、精霊や動物といった人間ならざる存在との関係についても当てはまる。

たとえば私の調査地である南インドの村で、人びとがやりとり際に際してもっとも気を遣っていた相手は、トラやヘビといった野生動物の霊を含む神霊たちであった。神霊のもつ野生の力は人間にとって危険であると同時に、土地や村の再生産を可能にする豊饒性ほうじょうに満ちている。それは人びとを生かしもし、殺しもする。だから村人たちは儀礼の中で、憑坐かまに憑依ひまういした神霊に供物を捧げてその力を慰撫いぶし、力の一部を受け取ったのちに、ふたたび野生の領域に送り返す。同様に、村ではマリーと呼ばれる天然痘の女神もまた、祭祀まつりの対象となっていた。村人たちは女神に供物を捧げ、その恐るべき力を慰撫し、鎮めようとする。

危険な「他者」に対する忌避や禁忌は、だから本来、単なる排除ではなく、相手の両義的な力を制御しつつ受け取るための方法のひとつであった。水田に引き入れる水の量を調整するように、そうした儀礼は危険で豊饒な力の流通を調整し、人間と野生との境界を引き直す作業である。それは自他の根本的な差異に基づく絶対的な境界ではなく、むしろ、ふと気を許せば互いが混ざりあってしまうことを前提とした脆弱な境界であり、だからこそ人びとは日々相手との関係を気遣い、禁忌に従い、互いの差異を生みだしつつづける。

(石井美保「センザンコウの警告」による)

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に改めなさい(解答は楷書ではっきりと書くこと)。

問二 傍線部①「自」でもあり他でもある物質サブスタンスと同じ内容の箇所を、本文中より二〇字以内で抜き出なさい。

問三 傍線部②「とすればウイルスは、いわば文字通りの「サブスタンスコード」だといえるかもしれない」とあるが、筆者はウイルスを「サブスタンスコード」といえると考えているのか。筆者の考えを説明しなさい。

問四 傍線部③「これまでに一度も存在したことはなかった」と同じ意味で用いられている単語を本文中より抜き出しなさい。

問五 筆者は「分人」をどのような概念だと考えているか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

問六 筆者は、「禁忌」をどのような役割をもつものと考えているか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

問七 傍線部④「ふと気を許せば互いが混ざりあってしまうことを前提とした脆弱な境界」とあるが、自他の脆弱な境界について、身近な例をあげながら二〇〇字以内であなたの考えを述べなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(二〇%)

おほかたこの所に住みはじめし時はあからさまと思ひしかども、今すでに五年を経たり。飯の庵もややふるさとなりて、軒に朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづからことのたよりに都を聞けば、この山にこもりゐて後、やむことなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその数ならぬたくひ、尽してこれを知るべからず。たびたび臥す床あり、昼るる座あり。一身を宿すに不足なし。寄居は小さき貝を好む。これ事知れるによりてなり。みさごは荒磯にゐる。すなはち人をおそるるがゆゑなり。われまたかくのごとし。事を知り、世を知れば、願はず、わしらず、ただ静かなるを望みとし、憂へ無きを楽しみとす。

惣て世の人の栖を作るならひ、必ずしも事のためにせず。或は妻子眷属のために作り、或は親昵朋友のために作る。或は主君師匠および財宝牛馬のためにさへこれを作る。われ今身のためにむすべり。人のために作らず。ゆゑいかんとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふべき人もなく、頼むべき奴もなし。縦ひろく作れりとも、誰を宿し、誰をか据ゑん。

(注) ○寄居―ヤドカリ。巻貝の貝殻に体を収めて生活する甲殻類の一種。

○みさご―水辺を好む鷹の一種。大木や崖の上などに巢を作る。 ○わしらず―あくせくしないで。

問一 傍線部A～Cの単語の意味を、文脈に即して答えなさい。

問二 波線部「やむことなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその数ならぬたくひ、尽してこれを知るべからず。」を、必要な語句を補って現代語訳しなさい。

問三 この文章の作品名を、次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。また、それを選んだ根拠を、本文に基づいて説明しなさい。

- ア 徒然草 イ 枕草子 ウ 源氏物語 エ 方丈記 オ 平家物語 カ 太平記

3

次の漢詩を読んで、後の問いに答えなさい。設問の都合で返り点と送りかなを省略したところがあります。(配点二〇%)

賞^ス牡丹^ヲ　　劉禹錫

庭前^ノ芍^{シヤク}薬^{ヤクハ}妖^{トシテ}無^シ格

池^①上芙蕖^ニ浄少^シ情

唯^②有牡丹^ニ真国色

花^③開時節^ニ動^ニ京城^ニ

(注) ○格—品格。 ○芙蕖—蓮の花。

○国色—国一番の美人。

○京城—唐の都である長安を指す。

問一 傍線部①を現代語訳しなさい。

問二 傍線部②を書き下し文にしなさい。

問三 傍線部③をわかりやすく説明しなさい。

『全唐詩』による